

関西地方でのことばの広まりかた

藤原与一

関西域に見られる、言語事象伝播の傾向について、述べてみたいと思います。

一 「中国四国西近畿」言語地図

私の『方言学』（三省堂 昭和三十七年）の三二八～九頁に、「座敷」(家の客間)の名称の分布図があります。それを、うっしとつかかかけてみます。(第一図)

はじめ、私は、この図にさほど目をとめていませんでしたが、ふとした機会に、これを見て、おどろきました。「座敷」の名のあれこれ、分布のさまが、いかにもおもしろうございます。

まず、まるで矢じるしとも言える符号の分

布に、お目をとめて下さい。まあ、これは、どなたも、最初に、すぐ、お気づきになりましよう。分布の優勢なものですから。

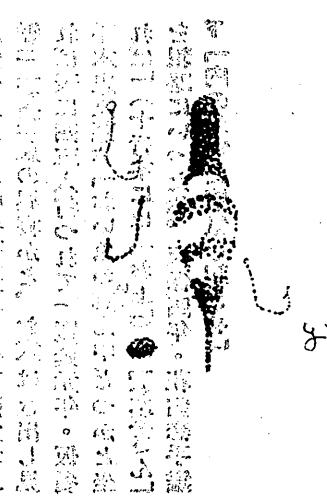
この図は、中国・四国、西近畿(主として兵庫県・大阪府)、九州のすこし、を対象とした調査の結果の、一表覧であることを、おことわりします。

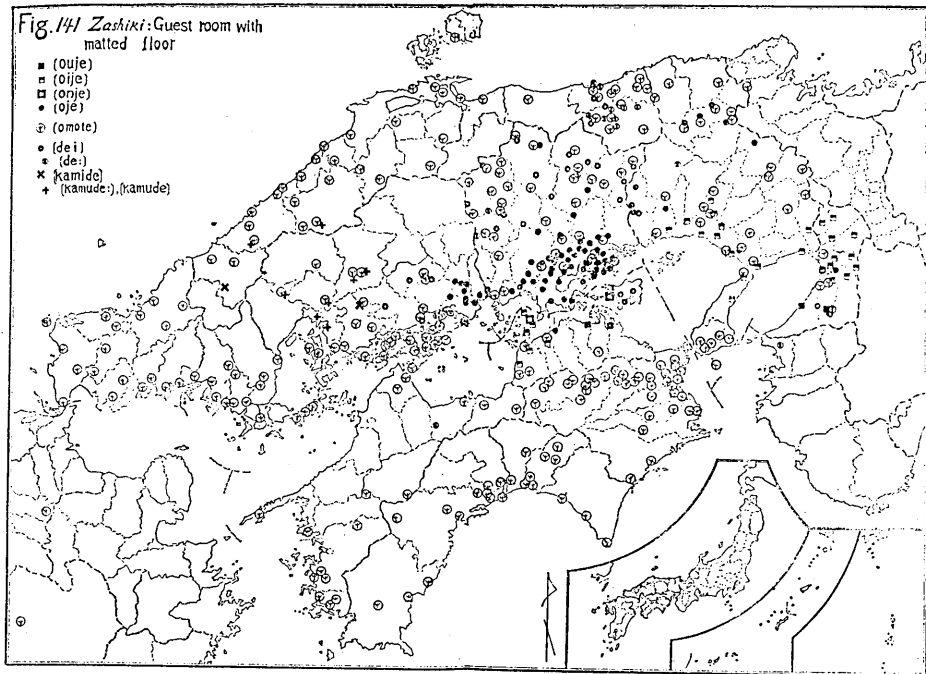
つきには、黒まる符号のまとまりが、お目にとまるのではないでしょう。ことによると、この分布が、いちばんはじめに、みなさんのお目を射たかもしれせん。——地図に、ぐっと、目をお寄せになった場合。……(地図全体を大観した時は、まるで矢じるしの符号の、広い分布が、やはりはじめに、目

にうつるのではないでしょうか。)

黒まる符号には、つれあいの符号がいくつもあります。太線の四角符号もあれば、四角の半半分を黒くぬった四角符号もあり、黒ぬり四角符号もあります。これらが、黒まる符号と関連しあって、近畿から四国香川県に分布しています。

以上の、まるで矢じるしの符号の分布と、黒ぬり系の諸符号の分布とを見あわせますのに、図上、どうも、前者符号の事実が、さきに関西地方におこなわれていて、そこへ、あとから、後者符号の事実が広まったのではないか、と思われてきます。それも、近畿から西へと広まったかと思うけると、ちょうどよ





第一図 「座敷」名称

いありさまになっています。
 「座敷」のことを、「オモテ」と呼ぶならわしが、まずよく全域に流布したようです。やがて、黒ぬり系諸符号の事実が、文化の中心域におこって、その、新しい言いかたの習慣が、地方へ地方へと、伝わっていったかと、見うけられるのであります。

なるほど、「座敷」は、「表」(おもて)でありましょう。今日、あらたまっては、「座敷」を「オモテザシキ」とも言っていますね。晴れの席を、「オモテ」と名づけたのは、たしかに適切で、私どもの遠い先輩・先祖は、ごくしぜんに、早く、この名をつかったかと思われまます。九州にも、「オモテ」の分布が見られます。近畿にもあります。

古くからの、その一般的な名称の広くおこなわれる中へ、新名、「オウエ」(お上)が登場したことでしょう。これは、「上」にわざわざ「お」をつける言いかたです

から、そうとうに、こったものです。おそらく、「子どもさん」のことを「オ子タチ」などとも言った知恵が、早く、「オ上」を創作したのではないでしょうか。ことあらたまつた「オウエ」という新名は、しだいに人々に採用され、広められたようです。

「オウエ」につれ、それものが「オイエ」です。これは、「オ家」でしょうか。諸辞書に、「お家」の語を見ることができません。前田勇さんの『近世上方語辞典』には、

おいえは「御家」必ず「お」を冠する。①土間に對して、座の上。主婦の居間、囲炉裏のある広間など特定の室をさすのではない。文政四年カ・浪花方言「御家え上る」。座敷へ上がる也。元文六年・伊豆院宣源氏鑑二「又三蔵の昼寝かと、お家はき出し見れば表に四五人打つれて」寛延元年・仮名手本忠臣蔵六「おいゑの真ん中どつかと坐れば」(十行本には「お上」)②「お家さん」を粗略にいった称。天保四年・花雪窓手鑑下「内のお家に格気を起させ」

とあります。「オ上」なり「オ家」なりが、「座敷」客間の名としても、おこなわれるようになったのではないでしょうか。ともに似た発想の名まえのように思われます。

方言上では、「オウエ」が変じて「オイエ」

になることも、ありはしなかったでしょう。私が前掲の図を作った時は、両者の分布状況を見て、右の解を重んじました。たまたまということですが、前田さんのご本に、「お上^{お上}」とあるのは、私には、興味ぶかいことと思われまます。——「オウエ」[o:ɛ]から「オイエ」[oi:ɛ]は、「o」√「i」の変化で、すぐにできたのではないのでしょうか。(「e」に引かれもして。)そうではなくて、もともと、「オ上」「オ家」の二語が、方言上に流れ伝わったのだとしても、二者は、口ことば——〔発音〕——では、兄弟分のようなものです。さほど気にとめないものを言う人たちの間では、これらは、どちらがどちらとも、わからなくなってしまうがちだったでしょう。二者の分布は、よくつれあっています。「オンエ」[on:ɛ]は、「オイエ」からできたものでしょうか。——方言にありがちの、「イ」と「ン」との交替で。香川の島での様子は、右の変化を思わせます。「オウエ」から「オンエ」も、できてよかったことかと思われまます。いずれにしても、「オンエ」が、変化の、一つの果てであることは明らかでしょう。分布も、そのことを、よくものがたっています。

「オエ」[oi:]というのが、また、転訛の果ての形ですね。これが、岡山県下、つづいて広島県東南部と、近畿から言えば西の先に見え、また、近畿でも、阪神からは距った地帯に見えるのは、もっともなことに思えます。「オウエ」なり「オイエ」なりの流布するうちに、先の方で、だんだん、しぜんの変化形、「オエ」が生じたのではないのでしょうか。もっとも、岡山・広島の両県の方では、いっそう、「オエ」が生じやすかったかもしれません。この方は、[ɛ]√[ø:] [ø:] [ø:]、[o:]√[ø:] [ø:]のさかんな所ですので、「オエ」(↓[oi:ɛ])への音変化も、しぜん、おこりやすかったかとも察せられます。東の愛知県下なども、「おけあやま弁」に「おけあーせことば」というわけで、岡山県方面のに似た発音をする所ですが、この方にも、「オエー」「オーエ」「オンイエ」「オンエ」のあることが、『日本国語大辞典』(小学館)の記事でわかります。

以上で、黒ぬり系諸符号の諸語のとりあつかいがおわかりました。これら一体の、山陰へよりは山陽に、ずっと伸びている分布相に、かさねてご注意下さい。(阪神へのご留意はもとよりとして。)

さて、右の黒ぬり系諸符号(「オウエ」類)の分布の外がわに、太線黒まるの符号や、まるにたてぶと線の符号、濃い掛けじるの符号、濃い十字の符号が見えます。「デイ」「デー」「カミデー」「カムデー、カムデー」の分布です。——これらが、「オモテ」の広い分布と、「オウエ」類の集中分布との間に、はさまったかっこうでもありますね。

「デイ」は、「出居」と書きあらわしうるものでしょう。昭和二十八年五月十五日発行の「新日本分県地図 京都府」(和楽路屋)の「県下要覽」の中の、「物産・方言」の、「方言」の条にも、

父を「お出居さん」とあります。お父さんはしばしば客間の方に
出て居るので、「お出居さん」でしょうか。
出て居る客間が、また、世に「出居」(デイ)と呼ばれているのもうなずかれます。

(家の奥の間などが、「デイ」と呼ばれるはずはなかったでしょう。「出る」となれば、やはり、晴れの、おもての方の間へだったろうと思われまます。そこへ出る、おもな人が、主人たる「父」であったことは、言うまでもありますまい。)

私は、瀬戸内海の大三島の北端の一集落に
うまれましたが、少時から、「レー」という
ことばを知っていました。「デイ」(出居)の
ことです。子どもは、みだりにそこへはいる
ことはゆるされていません。時たまはいつて
あばれていては、叱られました。「レー」は、
やはり、文字どおりの「客間」(父が晴れが
ましく人と応対する所、お客呼びのもてなし
場所)でした。私は、のちに、方言を研究す
る身となりましたが、この「デー」というの
は、めずらしい一音語でもあるので、何のこ
とか、久しくわからないでいました。「こと
ばの地図」を作る研究にもはいるようになって、
——さきにかかげたような図をこしらえ
てもみるようになって、そうだったのかと、
がてんがいったしだいです。「レー」は「デ
ー」の訛りなのですね。

「カミデ」というのは、「上の出居」で、も
っともしごくの名称です。人は、「デイ」の
位置・地位を考えて、念入りに「カミ出居」
とも呼んだのではないでしょう。よくあ
る、名づけのていねいさです。「カムデー」
「カムデ」が、「カミ出居」の発音の訛りであ
ることは、申すまでもありますまい。

さて、この「デイ」類の分布が、図上に見

られるとおりのありさまであるのは、私ども
に、どういうことを考えさせましょうか。

(まず、大阪府下などにもあるのを、見のが
さないようにして下さい。)京都弁にも、「お
出居さん」との言いかたなどもあるのからす
ると、「出居」という言いかたは、みやこ地
域にもあったとされます。——今、京都に、
「座敷」のことを言う「デイ」があるかどう
かは別としまして。「出居」ということばは、
「客間」の名としても、たぶん、中央域から
地方へと、広まったらしいことが想像されま
す。現在の「デイ」類の分布が、兵庫県北の
一部から鳥取県因幡に、ついで、岡山県東の
作州から、備中・広島県下・島根県石見にと
見られるのは、かつて「デイ」類が、中央か
ら当地方へと、伝播・流布してきたことを、
よく思わせるのではないでしょう。山陰が
わは、因幡までの分布ですが、山陽がわは、
ずっと西まで(石見は安芸のつづきで山陽
的)、問題の事象が分布しています。南北の、
この一連の分布相は、中央方面から地方へ、
ものの流布してきたこと、流布してくる道理
(ものの広まってくるきかた)を、味わい深
く、よみとらせるように思います。山陰地方
へは、交通路の不活発さなどのため、伝播

が、伸びにくかったのではないでしょう。か。
山陽地方へは、交通路はより開けているし、
受け入れがわの生活文化の状況もより活発と
いうようなことで、中央からの伝播が、いち
だんとさかんだったことかと察せられます。
「デイ」類の分布の西端方面に、「カミデ」
などが分布しています。ものの流布の末端方
面であっただけに、この方には、こうい
う、新意匠の語もできているということな
のでしょうか。それにしても、このさい、山口県下
には「デイ」類がなくて、石見にはあるの
は、双方の土地の、方言上の性質差を考えさ
せます。しぜんには、広島県下のものを、石
見は、比較的よく受け入れたのでしょうか。
とかく、石見は、広島県安芸に同じがち
です。

さきの「オウエ」類の場合にも、右の「デ
イ」類の場合にも、中央から地方への、——
今は近畿から山陽(ならびに四国)・山陰へ
の、ことばの、しぜんの広まりかたが、じつ
によくわかるように思われます。自然であ
って合理的な広まりかたが、ここにあると、言
えるのではないでしょう。

右二者と、「オモテ」との、三者の分布の

相互關係を、図上で解釈してみますれば、当初には、「オモテ」が広く分布していたのだろう、と、まず解されます。つぎに中央から新しく流布し伝播したのが、「デイ」類だったでしょう。——これは、今、「オウエ」類に押され、押しやられたかっこうで、中央から言えば、「オウエ」類の見られる所よりも遠い所に分布しています。図に、「デイ」類が、「オウエ」類よりも先に、地方流布をとげたことが明らかであります。「オウエ」類は、要するに、第三の新興勢力をなしたものでしょう。

したがって、私どもは、語としても、「客間」を言うものでは、「オモテ」がなかなか古くて、つぎが「デイ」(出居)類、つぎが「オウエ」類、と考えることができます。

ここで、史上の文献に、右の三派の語をたずねることが、課題となります。『日葡辞書』には、「Dei」が見え、そこに「ザンキ」という語もあがっています。私は、さっそく、畏友の森田武さんの所につけ、教えを乞いました。『日葡辞書』の、その説明は、

同義語、ザンキ。

お客さんをそこでもてなす客間、またはへや。

というのだそうです。つづけて、この辞書に、他語をたずねていただきますと、「オウエ」も「オイエ」もなく、一つ、「オモテノマ」がありました。これは、

船のへさきの客間、または家の正面の間。と説明されているそうです。(船の「オモテノマ」ということは、今日も聞くことばですが、『日葡辞書』の編者は、当時、よくまあ、こういう点も、見のがさないで、とらえ得たものだ、おどろかされます。「家の正面の間」のことを、「オモテノマ」と言ったとすれば、「オモテ」の語を、「客間、座敷」を言うのにつかうことも、当時すであつたかも知と、想像されますが、本書に、「客間、座敷」を言う「オモテ」はあがっていません。森田さんには、節用集の方面もしらべていただきましたが、「出居」はありませんでした。「座敷、客間」を言う「出居」は、そんなに古いことばのようではありません。もっとも、米谷巖さんのご好意で見ることのできた、『嬉遊笑覧』卷一上「居処」の中には、『源氏物語』「柏木」巻の、
れととの御いでゐのかたに入たまへり
という引用が見えます。「いでゐ」の語そのものは、古くからあるのでしょうか。です

が、「デ居」となると、これはまた別かと思えます。

「客間、座敷」を言う「デイ」は、さほど古いものではなく、と言つても、近古のもので、「オウエ」類は近世のもの、ということになりましょうか。三派の語の新旧關係は、おおよそ、「座敷」名称の、さきの分布図で解釈されるようなものであつたらうと思われま

二 「中国四国西近畿」の他の図

「座敷」名称の図は、関西での、ことばの広まりかたを、よく、とらえさせました。ことばの移り変わりの歴史を反映しつつ、りくつよく、ことばの、地方に流布しているありさまが、右の図で、よくとらえられました。このさい、重要視されるのは、伝播流布に、すじ道による、勢力の大小があつたということです。(したがって、伝播に遅速があつたという事です)——つまり、山陰へよりは山陽方面に、ものがより活発に広まったということ

ことです。このことは、他の言語地図を見ても、よく理解することができます。「いちじく」名称の図を見ましても、「トーガキ」という語が、

大阪府・兵庫県南にいちじるしくて、山陰には、ほとんどなく、山陽（それに石見）に、広く見わたされます。内海の島々にもずっとこれが見られ、四国本土にも、いくらから見られます。私は、この場合、内海域の分布は、山陽道すじのものの南下によるものであらうと見ています。「トーガキ」は、このように、近畿にさかんで、かつ、山陰方面へよりも山陽方面に、くっきりとした分布を見せています。西近畿・中国・四国の、全般にあるものは、「イチヂ（ジ）ク」「イチジユク」です。「トーガキ」は、「イチヂク」ののちに、新名として発生し、その、後生者であるのにふさわしく、山陽がわへはつよく分布したのではないでしようか。

思えば、「トーガキ」は「唐の柿」で、「唐」という漢語をつかった、しゃれた名です。「唐なす」「唐きび」などと、「唐」の字をつかった呼び名が、つきつきと思っておこされますね。こういった名称は、あい似たところに、おそらく、国の中央方面で、多く創作されたのではないでしようか。（「カライモ」の名は、西から東に流入したことがあっても、「トイモ」の名は、東から西に伝わることがあったのではないかとも思います。）新製

作の、時にはハイカラの、「唐になに」という名が、よく、地方へ伝播しただろうと思われます。その、地方というのが、西では、「早くも山陽道に」ということだったようです。

むかしの「唐ガキ」に対応する名、「西洋イチジク」などというのが、今日、ありますね。

つぎに、もう一図、打消ことばの「〜ザッタ」「〜ナンダ」を見ます。略図にしかかかれますと、西近畿・中国・四国では、つぎのようです。（第二図）

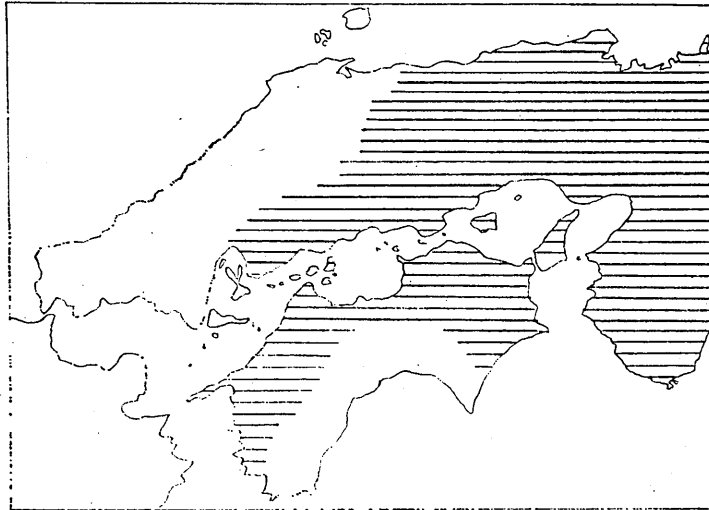
「どうどうゼザッタ」の「ザッタ」（「ダッタ」も）が、中国の西北から西部にかけて見られ、四国は、南の土佐に見られ、九州にも見られます。このような、遠辺・遠方の「ザッタ」分布の内がわに、「ナンダ」がひろがっています。「ナンダ」は、「ザッタ」ののちにうまれたものと思われますが、その「ナンダ」が、近畿で新興勢力をなしますと、やがてしだいに、西方へ伝播しはじめました。その、流布のありさまが、図上、横線模様のとおりであります。中国では、山陽道がわで、より西に、分布の伸びているさまが明らかであります。四国でも、およそ北半に、「ナンダ」

が分布しています。内海がわ、それに、近畿に近い阿波が（「阿波路」の淡路島とともに）、「ナンダ」をよく見せているのは、近畿中心のものへの伝播の結果として、もっともなことに思えます。

じつは、四国の、讃岐西部から伊予にも、「ザッタ」があります。また、中国の、岡山県（主としてその西半）・広島県にも、「ザッタ」「ダッタ」があります。これらの地域では、「〜ザッタ」の言いかたに重なって、「〜ナンダ」の言いかたが存在します。

そこで、こう言えると思います。「〜ナンダ」の言いかたは、新しく西に流布しはじめ、その伝播は、地理にしたがって、自然的合理的に伸び、徐々に、「〜ザッタ」の言いかたを駆逐している、と。この勢力の、まだ及ばない所が、「ザッタ」だけを示しているのですね。

四国では、土佐だけが、きわだって、「ザッタ」を示しています。——分布は、こうあって、いかにもと思われますね。四国山脈のむこうの南国土佐は、古態の「ザッタ」を守って、その地の歴史的地位を明らかにしています。



第二図 「～ナダ」の分布(横線じるし)

「なにになにダ」「ジャ」「ヤ」という、言いきりことばがありますね。このうち、「ジャ」と「ヤ」とでは、「ヤ」の方が後輩だと思われれます。「ジャ」から「ヤ」ができたと思いますか。新興勢力の「ヤ」は、また、近畿中央部に早くでき、できたものが、——に四方へ広まっていったようです。

ところでこれは、西は兵庫県下どまりで、岡山県下には、広まっています。(四国の香川県などには、かなりよく「ヤ」が見られますが、今は中国がわのことを申しませぬ)なぜ、岡山県下には、「ヤ」ができていないのでしょうか。(また、受け入れられていないのでしょうか。)

「ヤ」は「ジャ」よりも、発音の、よわく軽いものです。岡山弁には、抑揚の、

○オトナリー ヤッタンジャ。おとなりへやったのよ。(その猫の子を。)

など、「ジャ」を、声高に伸ばして言う習慣があります。こういう中へは、「ヤッタンヤ」といった調子の、やわらかく軽い「ヤ」は、根づきにくいのではないのでしょうか。

抑揚の調子に、いささか別趣の認められる近畿南辺に、また、近畿内のことではありますが、「ジャ」がよくおこなわれています。

三 国立国語研究所『日本語地図』

近畿の南辺と、四国の南国土佐と、これらはともに、近畿のみやこ方面からの、先述のような、事象の新伝播には、とり残されがちだったようであります。

国語研究所の言語地図、149の「かたぐるま(肩車)」の図を見ますと、ほかならぬ、四国南半と近畿南部とに、共通して、「クビウマ」の分布が見られます。類例は、他図にも見られます。このような彼我の一致は、中央からのもの(また、ものをおこす可能性)を受容する、遠隔地位者双方の、境遇の類似を、よく示すものでありましょう。(50・3・19)

(ふじわらよいち・国語学)